

天草崎津・今富地区における身近な自然環境の変遷に関する研究

熊本大学工学部社会環境工学科 学 ○竹中 裕基

熊本大学政創研 正 田中 尚人

熊本大学政創研 正 岩田 圭佑

1. 研究の背景と目的

近年、大都市だけではなく、農村部や里山においても生態系の保全が求められている。重要文化的景観選定地では、歴史、自然環境、生活・生業を一体とした保全活動が進められている。このような地域においてこそ、地域住民が常に親しんでいる身近な自然に対しても十分な調査を行い、住民と自然環境の関わりについて考える必要がある。

そこで、本研究では重要文化的景観選定地における身近な自然環境の変遷について、考察することを目的とする。そのため、実空間における自然環境の変遷を把握する。そして、子ども時代の自然と関係する遊びについて調査を行うことで、実空間と自然観の変遷における関連性について分析する。

本研究では、熊本県天草市崎津・今富地区を研究の対象地とする。崎津地区は2011年2月に、今富地区は2012年9月に重要文化的景観に選定されており、カクレキリシタン文化の存在や、漁村と農村の特徴や関係性の残る地域である。

2. 崎津・今富地区における自然環境の変遷

2.1 自然環境の変遷の整理

(1) 農業

土地利用をまとめると、図-1 のようになる。1904年から1945年の間に水路が発達している。その後1957年にはほ場整備がなされ、今富新田については現在とほぼ同じ形となった。その後、1965年以降、

表-1 崎津・今富地区の森林の変遷

西暦	年号	森林の変遷
1938	13	自分たちの薪炭としての利用
1939	14	今富炭鉱の坑木としての利用
1940	15	一部、崎津から長崎に輸出していた
1941	16	松の利用
1942	17	松くい虫の発生
1943	18	坑木として雑木が多く使われはじめる
1944	19	
1945	20	
1946	21	
1947	22	
1948	23	
1949	24	
1950	25	
1951	26	
1952	27	
1953	28	
1954	29	
1955	30	木材運搬船が帆船から機械船へ
1956	31	7月 霊仙天草国立公園指定
1957	32	造林されはじめる
1958	33	
1959	34	
1960	35	木材輸入自由化
1961	36	
1962	37	
1963	38	木材輸入全面自由化
1964	39	3月 今富炭鉱閉山
1965	40	
1966	41	
1967	42	
1968	43	
1969	44	
1970	45	
1971	46	
1972	47	
1973	48	
1974	49	
1975	50	
1976	51	
1977	52	
1978	53	
1979	54	
1980	55	
1981	56	
1982	57	
1983	58	
1984	59	
1985	60	
1986	61	
1987	62	
1988	63	
1989	64	
1990	65	
1991	66	
1992	67	
1993	68	
1994	69	
1995	70	
1996	71	
1997	72	
1998	73	
1999	74	
2000	75	
2001	76	
2002	77	
2003	78	
2004	79	
2005	80	
2006	81	
2007	82	
2008	83	
2009	84	
2010	85	
2011	86	
2012	87	

今富地区の水田は発達した。1972年から1979年の間の最盛期を経て現在に至るまで衰退している。

(2) 森林

森林については、表-1のように戦前は薪炭の利用がなされていたが、戦後から今富炭鉱の坑木に利用

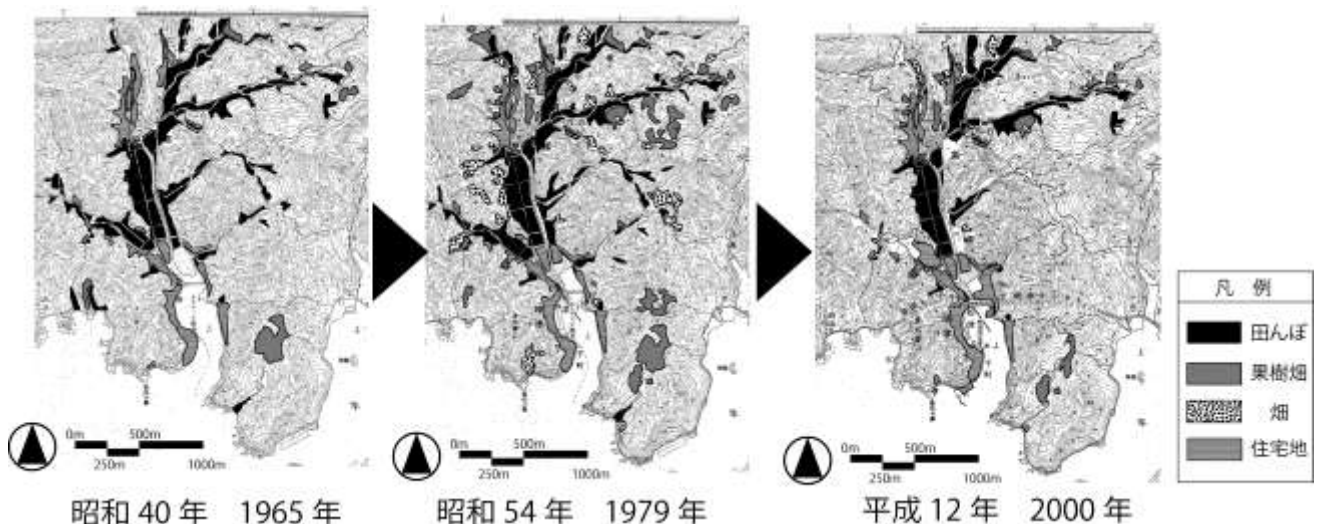


図-1 崎津・今富地区における土地利用の変遷

され始め、伐採と造林が加速した。その後、1970 年代の造林最盛期を迎えたが、木材需要の低下が起こり、当時植えられた樹木が多く残っている。

(3) 海岸

干潟については 1945 年以降、小中学校の土地として 1965 年までに埋め立てがなされ、減少している。その後 1972 年から 1979 年にかけて大きく埋め立てられ、この時代が最も海岸に変化が起こった時期である。崎津地区は、近代化にともない、港湾整備が多く行われている。

(4) まとめ

研究対象地において、農業や森林は 1970 年代を中心として、大きく変わっていることがわかった。また、海岸については、戦後から埋め立てなどの開発が長期にわたり行われてきたことがわかった。

2.2 崎津・今富地区における自然環境の現状

崎津・今富地区において、2012 年 9 月 23 日、24 日に現地を歩き、動植物を観察する調査を行った。本調査で発見した動植物種については、植物は 114 種、動物 52 種であった。

3. 崎津・今富地区における遊びの変遷

(1) 調査方法

身近な自然環境の変遷を追うために本研究では、児童期の自然遊びについて調査を行った。これは、身近な自然環境は生活と関係していると考えられるためである。調査方法はヒアリングとし、12 歳から 89 歳までの男女 17 名に対して児童期の自然遊びについて地図を見ながら話してもらう形式とした。

(2) 調査結果

この結果についてまとめると、図-2 のようになる。児童期が昭和 40 年代以前を世代Ⅰ、1991 年までを世

代Ⅱ、それ以降を世代Ⅲとして分析した。その結果、世代Ⅰ、世代Ⅱについては、山に入り、季節の果実の採取や、ウニ、サザエ、アサリの採取などを行っていた。しかし、世代Ⅲについては山に入るという行為がほとんどなくなり、魚介類の採取は釣りによるものがほとんどとなった。また、大きく変わったものは海水浴の場所である。世代Ⅲでは、ほとんど自然との接触が見られない。しかし、カケから海への飛び込みや、はげっぱ山(小学校の裏山)での椎の実とりはなされていた。

4. 児童期の遊びからみた自然環境の変化に関する考察

2 章及び 3 章の結果から、実空間の自然環境と児童期における自然との遊びがどのような関係にあるかについて考察する。

各世代の自然との遊びと自然環境の変遷を見てみると、アサリの採取やヤマモモ・アキグミの採取の終了時期は崎津湾の埋め立てや森林の伐採・造林の時期と重なる。そのため、自然環境の変化が自然遊びの転換点になっていると考えられる。また、自然に関する遊びで残っている場所は、自然に接触しやすい場所であると考えられる。カケについては、生業の場であるが、海と家をつなぐ場所であるため、自然と人をつなぐ場所にもなっていると考えられる。

5. おわりに

調査対象地の自然環境について、実空間と児童期の自然体験の双方から分析することによって、実空間と自然観の転換点には関係性があることがわかった。また、変化していく環境の中でも、過去から現在に至るまで認識され、親しまれている自然環境があった。

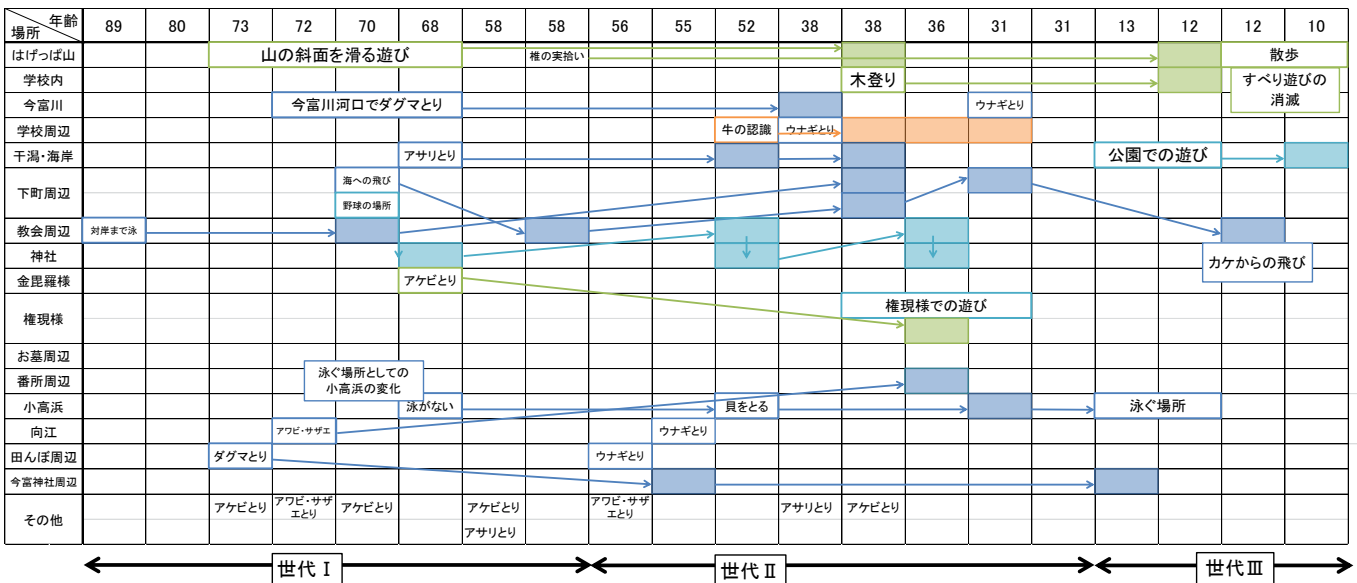


図-2 崎津・今富地区における児童期の主な遊びと遊び場の変遷